



TITLE:

# 感想1(東京夏の学校に参加して)

AUTHOR(S):

堀江, 忠児

---

CITATION:

堀江, 忠児. 感想1(東京夏の学校に参加して). 物性研究 1966, 5(5): 357-357

ISSUE DATE:

1966-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85854>

RIGHT:

## 東京夏の学校に参加して

感想 1

堀 江 忠 児 (東北大工)

Tokyo Summer Institute of Theoretical Physics という、いかめしい名前はともかくとして、筆者自身一番強く感じた印象は何といつても有意義であつたという一語につきる。それに反して予想外だつたのは所謂ゆる若手層の参加者が少なかつたことで、いささか残念に思っている。色々の問題を乗り越えて、ともかくも日本でこの様な Summer School を始めてられたこと云うことは何よりも Organizing Committee の方々の大変な御苦勞の末であつたと思うとその熱意と勇氣に対して拍手を送りたい。

この Summer School には、学会とか研究会等とは異なつた特別な味があることは、筆者自身の感じばかりでなく、出席者の何人も否定しない処と思う。5日間の大磯学校の成果は今直ぐこれを期待するよりも、むしろ長い眼で見なければならぬと思う。将来の日本の物理学会を背負つて行く責任を持つものは今度の出席者ばかりでなく、筈である。従つて来年も、又次の年も、出来ることなら毎夏、この様な School を持てればと希う気持ちが大きい。幾つかの小さい批判や、大きな反省は、それらを全て、来年も Summer School を持つ為の建設的な糧としたい。短かい休み時間に話し合つたこと気のついた点を思いつくまま下に列挙しよう。

① 5日間という短い期間のせいか lecture をつめ過ぎていたきらいがないでもない。栄養のある食物は充分時間をかけて身体に吸収しないと往々にして下痢症状を起しかねない。講師の持時間を今少し長く且つ、休み時間はせめて20分位はほしい。

② 英語に関する限り、ハンデイがあるのは否定しない。だからと云つて予稿集を作るとかの手間や労力をかける必要があるかどうか？（幸か不幸か今度の場合はなかつたけれど）講義は口から出て耳から入れる事にも、その意義がある様に思う。

③ 大磯アカデミ・ハウスについて、部屋に多勢つめ込み過ぎるとか、食事の量が少ない（値段に比して）とかの不平は聞かれたが、適当な代替地を提唱